

わたしと習字

御油小・6 駒村 葵子

私は年長のとき、親にすすめられて習字を習い始めました。もとも自分の字があまりきれいではなく、字をきれいに書きたいと思いい習ってみることにしました。

最初は筆の持ち方も分かりませんでした。しかし、書いていくうちに、おもしろいと思うようになっていきました。ふだんの生活では、えんぴつでしか字を書くことがなかったので、すみを使って字を書く体験はめずらしく、わくわくしました。字を書くことが楽しくなっていくきました。しかし、習字を続けていくうちに、だんだんと「うまく書けない」と思うことが増えていきました。何回練習しても、自分になつとくできるような字が書けませんでした。そんな日が続く、「今日は行きたくない」「もうやめたい」と思うようになってしまいました。でも、本当にやめることはありませんでした。字を書くことが好きだからです。何度もくり返し練習するうちに、だんだんと字を上手に書くコツが分かってきました。たとえば、筆を入れる角度を「十時の針の角度にすること、紙をしつかり手でやさえること」などです。コツがわかってくると少しずつ自分の字が変わっていくのが分かるようになりました。一画一画でいねいに書くようになってから、「前よりバランスが良くなっている」と思えるようになり、自分でも上達してるといふ実感がわいてきました。今日はきれいに書けるかなと、楽しみに感じる日が増え、習字に対す

る気持ちが前向きになっていきました。それから、毎月一度、発表される昇級や昇段の発表が楽しみになっていきました。たくさん練習して、きれいに書けたと感じたときに級や段があがると、「努力が形になった」とうれしく思います。特にむずかしい字を書いたときに合格できると「がんばって良かった」と心の底から思います。そうして続けていくうちに、「いつか一級までいきたい」という目標ができました。今までは何となく通っていた習字ですが、目標ができたことで「もつとじょうずにやりたい」という気持ちが強くなり、練習にもより力が入るようになりました。昇級の結果が届くたびに「次はもつと気をつけて書こう」と思うようになり、ただ字を書くのではなく、一画一画をゆつくりていねいに書くようになりました。今まで書いてきた字の中で、特に印象に残っている字があります。それは、展覧会に出した作品です。出品する作品は、いつものおけいこの何倍も気を使って書かなければならず、何回書いても納得がいかず、何回も何回も書き直しました。筆の動きや字のバランス、にじみやすい紙のあつかいにも気をつけながら、自分が一番だと思う一枚を仕上げるために取り組みました。「これだ」と思える作品ができたときの達成感は、とても気持ちが良かったです。その作品で「観峰賞」という賞をとることができました。大きな賞というわけではありません。でも、努力してとった賞は、とてもかがやいて見えました。うれしさで胸がいっぱいになりました。ずっとがんばってきたことが形になることで、「続けてきて良かった」と思えます。やめたいと思っても、あきらめずに続け、自分自身の自信にもつながりました。

習字を続けてきて、変わったと思うことがいくつもあります。続

けてみて分かったことは、習字はとても奥が深く、おもしろいという事です。ふだんの生活では、ただ字を書くだけで終わってしまいうことが多いです。しかし、習字では「書くこと」にしっかり向き合います。筆の動き、バランス、全てに気を配って書くことで、ただの「文字」から「自分にしか書けない字」になっていくのだと思います。

そして一つ一つの字が作品であるということを、習字を通して学びました。私は習字を通して学んだことがたくさんありますが、中でも一番大きかったのは、「一回ではうまくならない」ということです。だからこそ、あきらめずにコツコツ続けていくことが何よりも大切だと気づきました。それでもやっぱりやめたいと思うときはあります。でも、あきらめずに続けてきたから賞をとれたり、字がきれいと言ってもらえたりしました。たくさんのうれしいことに出会うことができたのです。なので、今ではあきらめないで良かったと思っています。

これからも毎回の練習を大切に、自分にしか書けない字をめざしていきたいです。努力を続けていくからこそ、達成感がうまれるんだと思います。そして、これからは今よりもっと上をめざして、習字の力を高めていきたいと思えます。